



この一冊

Vol. 118



当会会員 朴貴玲 (64期) ●Kwiryong Pak

「もの(を)食う」をテーマとして世界各地を旅した著者による本書は、いわゆるグルメ紀行でなければ、食の歴史や文化に関する考察本でもありません。「食う」の主語である人びとの生活と記憶を描写したルポルタージュ集です。時代背景は1992年。

「人びとはいま、どこで、なにを、どんな顔をして食っているのか」—著者が日本を旅立つ際に記した言葉です。

ダッカの残飯、難民キャンプのピター(蒸しパン)、猫用缶詰、フォー、ジュゴンの歯の粉末、ドイツの刑務所の囚人食、ドナー・ケバブ、アドリア海のイワシ、コソボの修道院の精進料理、聖なる水、チェルノブイリの家庭料理、ラプーフ(フキ)、ロシア海軍の給食、塩コーヒー…。

著者が、「震え怯えて、あるいは喜んで受け入れた、食いもの、飲みもの」のほんの一部です。

旅立ちの際の言葉のとおり、本書の視点は、あくまで食べ物の味より人びとの顔に向けられています。そして、その顔は、各地の美しい風景にまとわれています。

「さっきから、着飾った貴婦人と何度もすれちがって

『もの食う人びと』 文庫版



辺見庸 著
株式会社KADOKAWA
720円(税別)

るみたいだ。…香りのせいなのだ。菩提樹の黄色い花がきつすぎるほどにおっているだけ。…『もっとなにか食べたほうがいいな』私はまた勧め。遠くで二発、砲撃音がした。アナはよろよろ立って、『レザンツェ』をこしらえはじめた。スープに入れるヌードルだ。…『水は一滴だって加えちゃいけないの』独りごちるのだが、水はもう入っているのだ。涙がほとほと小麦粉に滴っている」

これは、ユーゴスラビア連邦軍の攻撃で破壊されたクロアチア・トゥーラニ村の戦争寡婦・アナについて記した「菩提樹の香る村」です。アナから、「あんた、明日また来てくれるだろうね」と問わ

れるものの、著者が翌日アナの家を訪れることはなかったのですが…。

一話だけ、著者が人びとの顔ではなく、もの食う自分の喜び、魂の叫びを描写する回があります。ポーランドは炭鉱の町カトヴィツェでのお話。

「自分のふがいなさをのろいながら、シャワーを浴びた。口から、黒い汁をタコみたいに吐き続けた。墨が、あきれほどたくさん出てきた。喉がかわききっていた。鉱員クラブでまずビールを飲んだ。…そして、スープを飲んだ。ボグラッチという、見た目にはどうということもない、茶色い、具たくさん田舎スープ。『うーい!』私は叫んだ。さっきまで真っ黒だった舌に、よく煮込んだ牛骨と香味野菜の味が心地よく染みた。…喉がゴロゴロ鳴りだしそうだった。…『世界一だ』私はうなった」

どれほど美味しいのでしょうか。どうしても一度食べてみたいです。それこそ、ビールばかり飲んで運動はせいぜい裁判所までのウォーキングくらい、という私には、当分叶うことのない美味しさなのでしょう。思わず旅に出たくなる、「この一冊」です。 ■